

# 市史通信

## 【目次】

- 占領軍のいた街
- 日本水産の捕鯨基地  
—一九四八～五一年—
- 復興への第一歩  
—横浜地域の瓦礫処理問題—
- 写真で見る昭和の横浜  
—一九五一年桜木町事故現場—
- 横浜市史資料室  
紀要第二号
- 市史資料室たより



米軍施設が目立つ伊勢佐木町通り 1948(昭和23)年

朝比奈貞一家資料

## 第14号

【発行日】2012年7月31日  
 【編集・発行】横浜市史資料室  
 〒220-0032  
 横浜市西区老松町1番地  
 横浜市中央図書館・地下1階  
 【電話】045-251-3260  
 【FAX】045-251-7321  
 【E-mail】  
 so-sisiryou@city.yokohama.jp  
 【ホームページ】  
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/housei/sisi/>

## 占領軍のいた街

占領下横浜の姿は、多くの写真に記録されている。今回、「占領軍のいた街」戦後横浜の「出発」と題して開催する写真パネル展では、占領下と占領終了直後を中心に、横浜の街並と人々を撮影した写真を展示する。

これまで占領する側、つまり米軍が撮影した写真は多く紹介されているが、占領される側、つまり日本人が撮影した占領期の写真はあまりまとまって紹介されていないのが実情である。今回の展示会では、その両者の視点で占領下の横浜をとらえることに努めた。

一方、占領下横浜を対象とした記録文学や、占領期の横浜を舞台とした小説も、当時の姿をよく伝えている。占領下に暮らす日本人にとって、占領とは何だったのか、米兵やアメリカの文化・生活はどのように見えていたのか。以下、代表的ないくつかの作品に描かれた占領下の横浜を紹介し、写真とは違ったかたちで占領下横浜の様相を見ていきたい。その前に、まず占領・進駐の経緯と概略を述べておこう。

### 横浜の占領

占領軍の進駐は、一九四五（昭和二〇）年八月三〇日、厚木飛行場と横須賀から始まった。その日、マッカーサー総司令官が厚木飛行場に降り立ったことは、よく知られている。

しかし、厚木飛行場で待機していた

日本政府代表に面会もせず、マッカーサーが横浜に入ったことは、意外と知られていないのではないだろうか。第一一空挺師団の兵士はヘルメットと戦闘服に身を包み、小銃を肩にかついで実戦態勢で、マッカーサーと共に横浜に入り、関内地域を占領下に置いた。

横浜は、日本本土で最初に占領された大都市となった。その後マッカーサーは、九月一七日まで横浜に留まる。マッカーサーが去った後も、米第八軍が横浜に司令部を置き、当初は東日本、翌年初めからは全国の占領軍政を管理する任務を負った。そのため、占領期間を通じて横浜には、多くの米軍施設が置かれ、大勢の米軍将兵が駐屯した。その結果、横浜市内の広大な土地と多くの建物が接収された。接収面積が最大に達したと思われる一九五一（昭和二六）年一〇月現在、沖繩を除く全国の接収面積の内、横浜は約六二・三%を占めていた。GHQが置かれた東京は、約二・二%に過ぎない。宅地に限っても、横浜が約六一・三%を占め、東京も約一九・四%とはね上がるが、横浜とは大きな差があった。（以上の数字は、横浜市総務局『横浜市の接収と復興』一九五八年による）

つまり、全国の大都市の中でも、市街地の接収比率は、横浜が圧倒的に高かったのである。しかも、第八軍に続いて在日兵站司令部が横浜に置かれるなど、接収期間も長引いた。横浜の接収解除が本格的に進むのは、一九五〇

年代の半ば以降である。そのため、横浜は最も復興の遅れた大都市ともいわれた。

### 獅子文六と「やっさもっさ」

横浜生まれ、あるいは横浜に住んだ作家は多いが、横浜を舞台とした作品は実は少ない。しかも戦後となると、山本周五郎の「季節のない街」と獅子文六の「やっさもっさ」くらいではないだろうか。

獅子文六は一八九三（明治二六）年、横浜弁天通に生まれ、老松小学校に通うが、父の死後転校して東京に移る。その後、横浜に住むことはなかったが、ときおり横浜には足を運んだ。一九六九（昭和四四）年、文化勲章授章の直後に死去している。

「やっさもっさ」は一九五二（昭和二七）年に『毎日新聞』に連載され、同年新潮社から単行本として刊行された。翌年に松竹で映画化され、淡島千景が主人公を演じた。米兵と日本人女性の間に生まれた子どもたちを収容する孤児院を主舞台に、伊勢佐木町や馬車道、野毛など占領下横浜の街並と風俗がたつぷりと描き込まれている。孤児院を取り仕切る女性が主人公で、米軍将校やあやしげな外国人バイヤーなど、占領下らしい人物が登場する。

バスで移動中の風景として、一帯を接収されて兵舎などが建ち並ぶ中心市街地を描写し、「日本全国で、横浜ほど、戦争の大波を、頭からカブったところ



米軍住宅の並ぶ山下公園と海岸通り 1950年代前半

横浜市史資料室

で、占領政策の最初の指揮をしたのよ」と語らせている。日本占領のなかで、横浜が占める位置を正確によく表現している。

また、平和条約の発効によって、横浜の接収解除が進み、座間・相模原へと米軍施設が移っていくことが、土地売買をめぐる事件の背景として描かれている。「やっさもっさ」はまさに、占領から占領の終結にかけての横浜を舞台に描かれた貴重な小説であるといえよう。

### 「故郷見物」「横浜見物」

一方、同じ頃獅子文六は横浜を何度か訪れ、その記録を残している。一つは自ら随筆にまとめた「故郷見物」である。これは、一九四九（昭和二四）年、日本貿易博覧会が開かれている横浜を宮田画伯（宮田雅之か）と共に訪れた際の感想をまとめたもので、『随筆 山の手の子』（創元社、一九五〇年）に収録されている。

横浜に入った二人は、「博覧会に一顧も払はず」横浜の中心部に向かい、まずホテルニューグランドを訪ねた。

その屋上から眺める横浜の街並は「焼跡の惨状はまったく見られない。焼ビルは完全に補修され、デペンデント・

ハウスは程よく空地を埋め、屋根また屋根である。」と、一見復興が進んでいるようだった。しかし、その多くは米軍施設によるもので、「街を歩く軍人やその家族の数が、東京の五倍も十倍も多く感じられる」という。デペンデント・ハウスとは、米軍将兵の家族住宅のことである。

米軍施設が集まる地域は、まるで西洋のようで横浜新名所とも言われている。しかし、獅子文六は「この西洋は、それほど羨ましいものではない。」という。それらの米軍施設は、「すべてガサガサと、白っぽい、急造の雰囲気である。バラックの世界である。」と表現し、自分は「べつにこ、に住みたくとも感じなかった。」とそっけない日本、そして横浜の伝統と文化を知る文化人の自負であろうか、表層的なアメリカ文化を客観的に冷めた眼で見ている。

それから山手、根岸、中華街、元町、伊勢佐木町、野毛などを廻り、それぞれ感想を記している。とくに、占領下に置かれたことによる変化に眼を向け、獅子文六が生まれた弁天通周辺も接収のため、横浜商人の街も「今や全く消滅した。」「界限（カルチェ）そのものが見当たらない。」となげく。伊勢佐木町でも、「行人の九割は、占領地の秩序を保つ兵隊さん」とその家族だという。そして、占領軍の街となった横浜を評して、「敗戦の縮図」と表現している。





八木義徳(左)と牧野勲 年不詳  
牧野勲関係資料

もう一つの記録は、雑誌『キング』が行った企画「文六先生横浜に行く」である。一九五三(昭和二十八)年にミス横浜と共に横浜を訪ね、六月号にその取材記事が掲載された。「故郷見物」と同じような地域を廻っている。すでに占領は終了していたが、この頃はまだ占領下の様相が色濃く残っていた。獅子文六自身も「横浜見物」と題する手記を寄せ、「私は戦後の横浜に、故郷鼻根を離れても、同情を寄せざるを得ない。この都市ほど、敗戦の激浪を真っ向から浴びたところはない。」と述べ、「戦後のアメリカ色も、こゝが一番強い。なにか、日本の縮図のような都市ではないか。」と「やっさもっさ」「故郷見物」と同様の趣旨で、戦後の横浜を評している。

### 八木義徳の「ヨコハマ」

戦後の横浜をよく知る人々にとつて、こうした認識は共通していたようである。八木義徳は随筆「ヨコハマ」(高見順編『目撃者の証言』青銅社、一九五

二年)のなかで、「戦後、一望の焦土と化した横浜には急速に家が建ちはじめました。」「けれども、そこに建てられたのは日本人の家ではなく、進駐軍兵士の宿舎でした。」と、占領下の実情を指摘する。

八木は戦後横浜の特質を、「軍事基地ヨコハマーこれが戦後横浜の決定的な変貌であり、同時に戦後横浜の決定的な性格であります。」と言いつついる。「海岸通りの大きなビルというビルの屋上にはすべて星条旗が高々と掲げられ」「横浜は「占領」され、「外国人の、特に外国軍隊の街となった」。そして、戦後七年間を「軍都ヨコハマ」として生きてきた、つまり米軍に寄生してきたとまでいっているのである。



左から佐藤美子、大仏次郎、飛鳥田一雄 1967(昭和42)年頃 飛鳥田一雄資料

その背景にあるのは、昔のハマへの思いであった。八木は一九一(明治四四)年北海道生まれで、戦後横浜に移り住み、晩年は町田に移って一九九九(平成一〇)年に亡くなっている。「ヨコハマ」の冒頭で八木は、大佛次郎と音楽家の佐藤美子が横浜の街を歩いて「昔のハマはなくなつた」と嘆息をもらしたというエピソードを紹介している。

戦前、早稲田の学生だった頃によく横浜を訪れた八木にとつても、思いは同じだった。国際的な貿易都市の活気とエキゾチックな風景で、「横浜には横浜らしい独特の風格」があり、その「ハマの魅力」にひかれて、東京からも「ヨコハマ見物」に人が訪れたのだ

と戦前を振り返る。しかし、「その昔の横浜は明らかになくなつた、その要因は震災と占領だと指摘する。そして、最後に「新しい横浜はまだ生まれてない。現在の横浜は攪拌されながら胎動している」と、将来に期待を寄せて終わっている。

### 「ヨコハマの日本人町」

高見順編『目撃者の証言』にはもう一つ、宮内寒弥の「ヨコハマの日本人町ー野毛町ルポルタージュ」が収録されている。宮内寒弥は一九一二(大正元)年岡山生まれの作家、一九八三(昭和五八)年に亡くなっている。宮内は、野

毛は「横浜の日本人町」であり、「占領の落し児」だともいう。「占領によって焼跡に生れ、また、占領によって成長し繁栄して来た町」だからである。

横浜は「日本の身代りになった」ともいわれるように、全国の六割以上の接収地を引き受けていた。その結果、たとえば「ハマの繁華街伊勢佐木町は完全にアメリカ一色に塗りつぶされた」。たしかに、一・二丁目あたりには米軍のPX・クラブの他、スーベニアショップなど米兵相手の店が多かった。そこで、自ずと日本人はその隣の野毛に流れたというわけである。

野毛には闇市から始まり、カストリ横丁・クジラ横丁・くすぶり横丁などと呼ばれる飲食街が出来上がった。横浜では、中華街と並ぶ日本人の繁華街だった。これらの日本人街は、米兵の立入が原則禁じられる「オフリミッツ」に指定されていた。実際、野毛にはあまり米兵も立ち入らなかつたようだ。

このように、実は占領下の横浜では、接収されてまさに米軍の街となった地域と、日本人が中心の日本人街が共存していたのである。この両者が合わさって、占領下の横浜を形成していたといえよう。

占領下の横浜には、米軍の街と日本人の暮らす街が共存し、お互いに微妙な影響を与えあっていたのである。

(羽田博昭)